

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：22604

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19989

研究課題名（和文）19世紀アメリカ扇情主義文学の再検討 人種表象と地理的想像力の関わりから

研究課題名（英文）A Reconsideration of Nineteenth-Century American Sensationalism

研究代表者

細野 香里（HOSONO, Kaori）

東京都立大学・人文科学研究科・助教

研究者番号：40906822

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、家庭小説の代表的作家であるルイザ・M・オルコットの扇情的スリラー作品分析を通じ、扇情主義と感傷主義の差異を再検討した。そのうえで、扇情主義の代表的書き手であるジョージ・リップードの、都市人種暴動に取材した作品の背景に描きこまれた同時代の拡大主義的機運に着目し、扇情主義がいかにアメリカの領土拡大の欲望に寄与し、あるいは批判を加えてきたかを考察した。並行してチャールズ・W・ストダード、マーク・トウェイン、ジャック・ロンドンの太平洋を舞台とした著作群において、人種的他者を描く際に扇情的要素がいかに用いられているかを検証することによって、アメリカ文学における扇情主義を複合的に評価した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、地理と人種的他者という別個の大枠の概念が密接に関わり合っていることを踏まえ、南北戦争という地域間対立を経験し人種的他者に対する収奪行為によって成り立つ拡大主義を掲げ大国への道を歩んだ19世紀アメリカの葛藤を、扇情的文学作品を通じて読み解く試みである。近接概念である感傷主義と比べ、アメリカ文学研究の文脈で大きく取り上げられてこなかった扇情主義を分析対象としたことに一つの意義がある。特に本研究で取り上げたジョージ・リップードは本国アメリカでもいまだ十分に学術的研究の蓄積が十分になされていない書き手であり、今後も彼についての研究を継続することでさらなる学術的貢献を果たすことが見込まれる。

研究成果の概要（英文）：This study reexamines the difference between sensationalism and sentimentalism through an analysis of sensational thriller tales by Louisa M. Alcott, who is known as a leading writer of domestic fiction. I then focused on George Lippard, one of the leading writers of sensationalism, and examined the expansionist momentum as depicted in the background of his novel on the city race riot, reconsidering how sensationalism has either contributed to or criticized American territorial expansion. I also evaluated sensationalism in “long nineteenth-century” American literature by examining the use of sensational elements in the portrayal of the racial other in writings on Hawaii by Charles W. Stoddard, Mark Twain, and Jack London.

研究分野：19世紀アメリカ文学

キーワード：扇情主義 感傷主義 奴隷制 米墨戦争 南北戦争 出版文化 拡大主義 扇情小説

1. 研究開始当初の背景

19世紀アメリカ文学研究において、扇情主義／扇情小説と感傷主義／感傷小説は、ともに南北戦争以前期に隆盛した大衆小説を指す単語として同列に語られることが多く、また読者の好奇心を引き付ける内容に重視を置いた、文学的価値の比較的低い作品群としてみなされてきた点も共通している。とはいえ、両者は正反対の性質を持っていることもまた先行研究によって精査されてきた。感傷小説は、登場人物の悲劇的運命などを通じ、読者の同情や共感を呼ぶ作品を指すのに対し、扇情小説は、犯罪行為や性的逸脱などの非日常的な出来事を描き、読者の嫌悪と好奇心を煽る作品を指すとされる。文学作品と感傷主義の関係については、J・トムキンズ著『扇情的な構図』(1985)、S・サミュエルズ編纂『感傷の文化』(1992)をはじめ多くの先行研究があり、メロドラマ仕立ての感傷小説がいかにか当時の政治・社会状況を反映し、あるいはそれらに影響を及ぼしていたかが明らかにされてきた。特にL・ロメロの『ホーム・フロント』(1997)は、感傷小説が「正しく感情を抱く」ことを教育し中産階級の規範を確立することによって、規範から逸脱する存在、すなわち人種的他者に対する収奪と、アメリカの拡大主義を正当化してきたと喝破した。しかし、このように感傷小説についての研究は豊富に存在するものの、近接ジャンルである扇情小説の意義についての議論は、D・レナルズの『アメリカン・ルネサンスの底流』(1988)などの一部例外を除き、前者に比して十分に尽くされてきたとは言いがたい。

2. 研究の目的

そこで本研究では、感傷主義と扇情主義の差異を改めて明確化したうえで、19世紀アメリカ文学における扇情主義の意義を定義すべく、人種的他者表象と地理的表象に注目しながら、扇情主義／扇情小説がいかにかアメリカの領土拡大の欲望に寄与し、あるいは批判を加えてきたかを明らかにすることを目的とする。従来の扇情小説研究は、感傷小説や1860年代以降に隆盛したダイムノヴェル研究と比べ立ち遅れ、例外的に扇情小説を扱った先行研究もジョージ・リッパードなどの特定の作家や時期を対象を限定したものであった。しかし、前述した感傷小説を巡る研究や、ダイムノヴェルについての研究の国内外での発展は、扇情小説および扇情主義の本格研究の必要性を示す。加えて本研究では、扇情小説の隆盛した南北戦争以前期にとどまらず、その影響の名残が1860年代にかけて創作された文学作品にいかにか反映されているかという通時的比較分析を行うことで、扇情主義の文学史的再評価をすることを旨とする。

3. 研究の方法

上記の方針に基づき、本研究では以下の課題についての調査・考察を行った。

- ① ルイザ・M・オルコット作品から見る扇情主義と感傷主義の交錯：本研究の前提となる感傷主義と扇情主義の定義を精査する作業にまず着手した。そのために、家庭小説の代表作である『若草物語』の書き手として知られながらルイザ・メイ・オルコットを研究対象に加えた。そして、彼女が匿名やペンネームで創作していた扇情主義的スリラー作品を、ゴシックや犯罪小説の流れを汲んで成立した扇情小説ジャンルの従来の定義を再検討しながら分析した。
- ② ジョージ・リッパードの作品における扇情主義とアメリカ拡大主義の関わり：ジョージ・リッパード(1822-1854)の作品は①扇情小説の典型とされる『クエーカー・シティ』(1844)などの都市犯罪小説群、②アメリカ独立革命に取材した歴史小説群、③米墨戦争(1846-48)に取材した作品群の三つに大きく分類できる。本研究は①と③の作品群を主な対象とした。人種と当時の領土拡張の問題がいかにか作品中に描きこまれているかという点に主眼を置いて分析を行った。また、こうした作品分析と並行して、いまだ十分に整備されているとは言えないリッパード作品や関連研究資料の入手・整理に傾注した。
- ③ チャールズ・W・ストダード、ジャック・ロンドン(1876-1916)の海洋小説・旅行記群における扇情性：扇情性を付与する要素にカニバリズムといわゆる性的逸脱がある。本研究ではチャールズ・W・ストダード(1843-1909)の1860年代の太平洋紀行文群におけるカニバリズムとホモセクシュアリティの表象の分析を行った。紀行文で暗示的に描写される現地の少年との性的関係の描写との比較分析を通じ、人種的他者の表象と扇情的タブー表現の関わりを19世紀アメリカ文学における太平洋地域のイメージを踏まえながら論じた。また、世紀転換期の作家であるジャック・ロンドンのハワイを舞台とした作品を分析対象に加えることにより、扇情主義についての通時的分析の足掛かりとした。

4. 研究成果

- ①ルイザ・M・オルコット作品から見る扇情主義と感傷主義の交錯：

デイヴィッド・レナルズによれば、“sensational”という言葉に冠した小説ジャンルである扇情小説(sensational novel)は、狭義には1850-60年代に登場した、扇情主義的要素と同時代の感傷主義的小説の形式を組み合わせたハイブリッド・ジャンルを指す。この指摘を踏まえ、感傷主義と扇情主義の定義を精査しその差異を明確化するために、1863年に匿名で発表されたルイザ・メイ・オルコットの扇情主義的中編小説「闇夜のささやき(“A Whisper in the Dark”)」を取り上げ、本作がいかなる意味で扇情主義的であるのか、ゴシックや犯罪小説の流れを汲んで

成立した扇情小説ジャンルの従来の定義を再検討しながら分析した。加えて、典型的家庭小説として知られる代表作『若草物語』の主要登場人物ジョーの執筆活動の描写や母親から与えられる教訓、そして「闇夜のささやき」の主人公の少女シビルとその母親の関係から、女性作家オルコットが匿名やペンネームで扇情主義的作品を書くことを選択した背景を考察した。この成果を日本語論文「階上の狂女——ルイザ・メイ・オルコットの「闇夜のささやき」における母娘関係」としてまとめ、東京都立大学人文科学研究科発行『人文学報』第 518-13 号にて発表した。センセーショナル・スリラーの書き手でもあったオルコットの二面性、そしてそのもう一つの顔を隠し続ける選択を彼女に取らせた 19 世紀女性作家が置かれた環境については、数多くの議論がなされてきた。本論文では、この繰り返し論じられてきた問題点を、扇情小説と家庭小説（感傷小説）のジャンル論との関わりから再検討した点に意義がある。

②ジョージ・リッパードの作品における扇情主義とアメリカ拡大主義の関わり：

本課題を遂行するため、まず一次・二次資料の入手や先行研究の整理を行った。2023 年 8 月にはアメリカ合衆国ペンシルベニア州のフィラデルフィア歴史協会において現地資料調査を実施し、リッパードが編集人を務めた週刊新聞『クエーカー・シティ (The Quaker City Weekly)』の 1849 年発行分を閲覧した。データ化して持ち帰った資料の解析が今後の課題となる。並行して、フィラデルフィアでの人種暴動を主題としながらも、同時代の拡大主義を背景とする作品『殺し屋たち (The Killers)』(1849)について集中的に分析を行い、日本アメリカ文学会東京支部 5 月例会分科会において、それまでの成果を「ジョージ・リッパードの都市人種暴動譚における地理的想像力」として口頭発表した。具体的には、本作品において、フィラデルフィアでの人種暴動という極めて局所的な出来事が主題とされながら、物語のクライマックスに至るまでの筋書きに、同時代の違法奴隷貿易、そしてキューバ併合の目論見を織り込まれている点に注目した。そのうえで、作中、都市での人種間対立へ向けられた視点が、アンデバラム期の合衆国を取り巻く地政学の諸問題へと拡大される瞬間を辿りながら、レナルズによって急進主義者と評されたリッパードの白人労働者問題と奴隷制廃止をめぐる諸問題についての主張を再検討した。本作品を論じた発表は本邦では初となる。今後、上記の論点と扇情主義との関わりを明確化したうえで論文として出版することを目指している。

③チャールズ・W・ストダード、ジャック・ロンドン(1876-1916)の海洋小説・旅行記群における扇情性：

チャールズ・W・ストダードの 1860 年代の太平洋紀行文群におけるカニバリズムとホモセクシュアリティの表象分析を行った。いわゆる古典作家であるハーマン・メルヴィルの海洋小説におけるカニバリズムとホモセクシュアリティについては多くの先行研究があるが、同時代の書き手であるストダードの作品の意義については大きく取り上げられることがなかった。けれども、メルヴィル、ホイットマンらいわゆるアメリカン・ルネサンスの作家たち、そしてマーク・トウエイン、ブレット・ハートら西部文学の担い手たちという、異なる文壇グループに属する作家らと交流を持ち自身も創作活動をつづけたストダードは、19 世紀アメリカ文学を再考する上で重要な人物であるといえる。研究の過程で、当初から想定していたカニバリズム、ホモセクシュアリティというキーワードに加え、19 世紀中ごろからハワイ諸島で流行していたハンセン病についての描写を考察対象に加え、異人種間の異性愛・同性愛的関係性と病、太平洋上へのアメリカ拡大主義について、ストダード作品を通じて考察した。マーク・トウエインとチャールズ・W・ストダードのハワイ関連著作を比較しながら論じた論文“Curse and Sacrifice: Mark Twain's Long Conversion and the Unfinished 'Sandwich Island Novel' ”は、日本英文学会発行の学術誌 *Studies in English Literature* vol. 63 に掲載された。

加えて、アメリカ文学史における扇情主義的要素の通時的発展を検討するために、ジャック・ロンドンのハワイ諸島に取材した作品群を参照し考察を行った。特に、ネイティブ・ハワイアンのハンセン病患者を主題とした“Koolau the Leper”における身体表象に着目し、この成果を日本語論文「扇情的な身体——ジャック・ロンドンの「ハンセン病患者クーラウ」における人種と病」としてまとめ、東京都立大学人文科学研究科発行『人文学報』第 519-13 号にて発表した。トウエイン、ストダード、ロンドンら、19 世紀半ばから世紀転換期にかけてハワイを訪れた作家らが、人種的他者であるネイティブ・ハワイアンらを、扇情性を利用しながらいかに描写したかを比較考察することで、扇情主義の通時的研究の一つの足掛かりを作ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kaori Hosono	4. 巻 63
2. 論文標題 Curse and Sacrifice: Mark Twain's Long Conversion and the Unfinished "Sandwich Island Novel" "	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Studies in English Literature	6. 最初と最後の頁 19-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細野香里	4. 巻 518-13
2. 論文標題 階上の狂女 ルイザ・メイ・オルコットの「闇夜のささやき」における母娘関係	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 61-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 細野香里
2. 発表標題 マーク・トウェインとアメリカ扇情主義の伝統
3. 学会等名 2021年度東京都立大学英文学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------